

ふただび人称について^{注1.}

池 上 嶺 夫

「言語学入門」(以下「入門」とする)のなかの「人称」を論じた部分につきのような記述がみえる。「このように人称にも多様性が認められるが、基本的な人称は1人称〔+ego〕と非1人称〔-ego〕の二つである。そして非1人称の下位区分として、2人称と3人称を区分する。ブラジルで話されるポルトガル語(口語)では動詞に標示される人称は、1人称と非1人称の二つである。」(94ページ)。そしてこの記述に続いて動詞 *jantar* (夕食を食べる)の活用形を示してその例としているのであるが、人称が基本的に1人称と非1人称にわかれ、非1人称が2人称と3人称に下位区分されるという論拠が示されていない。そのかぎりではこの区分の当否を論ずることはできないが、ブラジルのポルトガル語の例があげられているので、それがその論拠(の一つ?)と考えることができよう。しかしブラジルのポルトガル語の例をもってその論拠とするならば、それには問題がある。

ブラジルのポルトガル語(口語)では、たしかに「入門」の言うように、いわゆる「話し手」としての2人称と共起する動詞は、いわゆる「話し手、聞き手以外の人や事物」としての3人称と共起する動詞とその形式を等しくしている。そのかぎりでは2人称と3人称を一括して非1人称とすることができるかもしれない。しかしブラジルのポルトガル語(口語)では

- (1) Quando é que a gente janta, papai? (オ父サン、僕達ハイツタ食ヲ食ベルノ?)

という言いかたがある。(1)の *a gente* は訳からもわかるように「話し手」をさしている。しかし *a gente* と共起している動詞は *janta* であって、(cf. *Maria janta*), *jantamos* (cf. (*Nós*) *jantamos*) ではない。*janta* は非1人称と共起する動詞であるから(何故ならば1人称と共起するときは *janto*, *jantamos* であるゆえ) *a gente* は非1人称ということになる。

母親が息子にむかって、たとえば

- (2) A mãe vai fazer compras. Você fica em casa.

(オ母サンハ買物ニ行ッテキマスカラ、アナタハ家ニイナサイネ)

と言ったばあいを考えてみよう。「話し手」はこれから買物に行こうとしている当の母親(*a mãe*)であるが、*a mãe* と共起している動詞は *vou* ではなくて(cf. (*Eu*) *vou fazer compras*), *vai* である。ここでも前の例と同じく *a mãe* は非1人称ということになる。

- (3) Aqui é César que está falando. (私 César デスガ)

3)は電話をかけた人が自分の名を名のとときの言いかたである。したがって *César* 自身が(3)を言っているのであるが、にもかかわらず動詞は *está* になっている(cf. (*Eu estou fumando*)). ということはここでも *César* は非1人称ということになる。なおついでに言えば

(4) *Maria está aí?* (Maria ハイマスカ?)

と電話で訊かれたとき、電話に出ているのが Maria 自身であるときポルトガルでは普通 Maria は

(5) *Sou eu propria.* (私デスカ…)

と答えるがブラジルでは

(6) *Ela mesma.*

と答えるのが普通である。6)と答える Maria 自身が自分のことをさすのに非 1 称の代名詞 *ela* を用いている。

ここにあげた二、三の例だけから見てもブラジルのポルトガル語では動詞に標示される人称は 1 人称〔+ego〕と非 1 人称〔-ego〕の二つである。とする考えかたに問題のあることがわかる。^{註2} しかもブラジルのポルトガル語のみならずポルトガルのポルトガル語も考慮にいれると、ことはさらに複雑になる。それは後者につきのような事実があるためである。たとえば

(7) *O senhor janta aqui?* (アナタハココデ夕食ラナサイマスカ?)

とならんで

(8) *Tu jantas aqui?* (君ハココデ夕食ヲシマスカ)

という表現も日常さかんにおこなわれている。(7)ではたしかに動詞にいわゆる 2 人称が標示されていない。したがって *o senhor* は非 1 人称である。しかし(8)になると動詞は *jantas* となっている。したがって主語がいわゆる 2 人称であることが動詞によって標示されている。このことからポルトガルのポルトガル語の人称は、はじめから、1 人称、2 人称、3 人称に区分されると言うことができ、そしてまたブラジルのポルトガル語とは人称の体系を異にすることができる。したがって上の(7)の「*o senhor* は非 1 人称である」という言いかたは正しくないのであって(7)の「*o senhor* は 3 人称(厳密には非 1 人称で 3 人称?)である」と訂正しなければならない。

(2)の文について言えば、もしこの文をポルトガルの母親が言ったとすれば、*a mãe* は 3 人称(厳密に言えば非 1 人称で 3 人称?)ということになる。また

(9) *Ele janta aqui?* (彼ハココデ夕食ヲシマスカ)

という文では、もしこれがブラジルで言われたとすれば *ele* は非 1 人称であるが、ポルトガルで言われれば 3 人称(厳密には非 1 人称で 3 人称?)ということになる。

いったい「人称」とはなんであろうか。「入門」における「人称」の定義は明確ではない。「1 人称は話し手、2 人称は聞き手、3 人称は話し手・聞き手以外の人や事物」という伝統文法の「標準的な説明」をあげ、「それ自身明快」であるとしながらも「一言では片づけられない点がある」と言って、「基本的な人称は 1 人称〔+ego〕と非 1 人称〔-ego〕の二つである。そして非 1 人称の低位区分として 2 人称、3 人称を区分する」と述べている。だがこれだけでは 1 人称、非 1 人称、2 人称、3 人称とはなんであるか不明である。しかし要するに、ポルトガル語の例にそくして言えば、1 人称とは主語として *janto*, *jantamos* と共起するもの、非 1 人称または 3 人称とは *janta*, *jantam* と共起するもの、2 人称とは *jantas*, *jantais* と共起するものということになる。

この定義が正しいとすれば、^{註3}「入門」にみえる「人称(person)という範疇は、話し手と聞き手という言語行動の基本的な要素に立脚する」(93ページ)という説明との関係は

どうなるであろうか。もしかりに「話し手」とは1人称〔+ego〕であり、「聞き手」とは2人称〔-ego〕〔+tu〕（非1人称〔-ego〕の下位区分としての2人称を〔-ego〕〔+tu〕とし、3人称を〔-ego〕,〔-tu〕とかりにする）であるというならば、結局、伝統的な人稱の定義へもどることになりはしないであろうか。もしそうであればすぐあとで述べる問題がここでも問題となろう。さらに「話し手」「聞き手」をこのように考えると、ブラジルのポルトガル語（口語）のように非1人称が2人称と3人称に下位区分されないばあいにはどうなるであろうか。

ポルトガル語の文典においても人稱の定義は伝統文法の「標準的な定義」を踏襲している。そのため、たとえば、

(10) O senhor conhece Filomena? (アナタハ Filomenaヲ御存知デスカ?) という文を説明するにあたって、o senhor は「意味は」2人称(=聞き手)であるが、「文法的には」3人称であるという。だが定義から2人称は聞き手をさし、3人称は話し手・聞き手以外の人や事物に言及するのであるから、o senhor は聞き手であり同時に聞き手でない、ということになる。(1)の a gente, (2)の a mãe, (3)の César も「意味は」1人称(=話し手)であるが、「文法的には」3人称であると説明される。しかしこのばあいにも、人稱の定義にしたがえば話し手でありながら同時に話し手でないということになってしまう。

このような説明の問題点は、容易にわかるように、人稱をそれぞれ「話し手」(1人称)、「聞き手」(2人称)、「話し手・聞き手以外のもの」(3人称)と定義しながら、1人称、2人称、3人称という語を用いるにあたって、その定義に首尾一貫して従うということをしていないところにある。「意味は」と言うときには人稱の定義に依りながら、「文法的には」と言うときは、その定義から離れてしまって、共起する動詞の形式に依っているからである。そのために2人称であり同時に2人称ではない、とか、1人称であるがそれと同時に3人称でもある、という矛盾した「説明」になってしまうのである。つまり、1人称、2人称、3人称という語を用いながら常にその定義に従ってそれを用いているのではなく、「文法的には」と言うときには、定義とは異なる意味をもたせて用いているのである。このことをさらに言い換えれば、言語活動においてそれぞれが担う「話し手」「聞き手」といった「役割」と動詞の形式という「文法的事実」の二つを基準にしているのである。

言語活動におけるそれぞれの「役割」と動詞の形式という「文法的事実」とはその性質をまったく異にしている。それゆえこの両者を同一の語によって表わすことは避けなければならない。そのために私たちは「人稱」のほかに「称格」^{注4} という言葉を用いたい。しからば「人稱」と「称格」はそれぞれいかなるものであるか。この問いにはつぎのように答えたい。「人稱」とは動詞の形式の決定に与るものであるのにたいして、「称格」は言語活動において担う「役割」にかかわるものである、と。具体的には「人稱」と「称格」はそれぞれ

- (1) 人稱には1人称、2人称、3人称があり、
 - 1人称は eu, nós
 - 2人称は tu, vós
 - 3人称は1人称でも2人称でもないもの
- (2) 称格には自称格、対称格、他称格があり
自称格は「話し手」

対称格は「聞き手」

他称格は自称格でも対称格でもないもの

と定義する。

ここで重要なことは、すでに述べたように、称格は動詞の形式の決定に与らないということである。ここに述べたことを具体的な例で説明すればつぎのようになる。

(13) *A mãe vai fazer compras. Você fica em casa.* (=2)

において、この文を言っているのは、つまりこの文の「話し手」は母親であるから、*a mãe* の称格は自称格であるが、人称は定義から3人称である。何故ならば *a mãe* は *eu* でも *tu* でもないからである。そして *a mãe* が「話し手」をさしながらも人称は3人称であるから動詞は当然 *vou* ではなくて *vai* となる。いっぽうこの文を買物に行く当の母親ではなくて、たとえば父親が息子にむかって言ったとしよう。

(14) *A mãe vai fazer compras. Você fica em casa.* (≠2)^{注5}.

(13)と(14)は表面的にはまったく同じであるが、実質的には異なる。なにが異なるかと言えばそれは *a mãe* の称格である。(13)では *a mãe* の称格は自称格であったが、(14)にあっては他称格である。話し手は母親ではなくて父親だからである。だが人称は依然として3人称である。したがって(13)と(14)の *a mãe* の称格は異なっているにもかかわらず動詞は *vai* であり、また表面的には(14)は(13)とまったく同じなのである。(13)、(14)における後半の文の *você* について言えば *você* は聞き手である息子をさしているのであるから、称格は対称格である。しかし人称は定義から1人称でも2人称でもないから3人称であり、したがって動詞も *fica* であって *ficas* ではない。(1)の *a gente*、(3)の *César*、(7)の *o senhor* についても同様の説明をすることができる。すなわち(1)の *a gente* は「話し手」(複数)をさしているから称格は自称格である。しかし定義から1人称でも2人称でもないから人称は3人称であり、したがって動詞は *janta*。(3)の *César* は「話し手」を指しているから称格は自称格。しかし人称は定義から3人称。したがって動詞は *estou* ではなくて *está*。(7)の *o senhor* は「聞き手」をさしているのであるから対称格、しかし人称は3人称。したがって動詞は *jantas* ではなくて *janta*。いっぽう(8)の *tu* は「聞き手」をさしているのであるから(7)の *o senhor* と同じく称格は対称格である。しかし人称は定義から2人称。したがって動詞は *janta* ではなくて *jantas*。(6)の *Ela* に見られるように、「話し手」である自分をさしているながら3人称の代名詞を用いるという一見奇妙な現象も人称、称格という二つの概念を用いることで説明することができる。(4)の *Maria* の人称は定義から3人称である。^{注6}したがって(6)で代名詞を用いて答えようとすれば、たとえ「話し手」であっても、人称が3人称であるから *ela* となるのは当然であろう。それ故(6)の訳は、強いて言えば、「私デスガ…」(=5)ではなくて、むしろ「*Maria* デスガ…」ということになる。

初対面の人にむかって、紹介されたとき最初に言う言葉は通常

(15) *Muito prazer em conhecer o senhor.*

かまたは

(16) *Muito prazer em conhecê-lo.*

である。(15)の *o senhor* についてはすでに述べたところから明らかであるが、(16)の *lo* (=o) はどう説明することができるか。*lo* (=o) は、言うまでもなく、聞き手をさしている。にもかかわらず代名詞は3人称の代名詞 *lo* (=o) になっている。これも人称と称格の概念を用いればよい。称格はもちろん対称格。しかし *o senhor* の人称は定義から3人称。

したがって代名詞を用いれば $lo (= o)$ 以外にはあり得ないということになる。

(17) Como se chama o senhor? (オ名前ハナントオッシャイマスカ)

(18) Como se chama esta rua? (コノ通りハナントイウ通りデスク)

(17)(18)の二つの se も同じ「再帰代名詞」であって、o senhor が聞き手をさしているということとは関係ない。o senhor も esta rua も人称はともに3人称であるから se という形で現われているのである。

「人称」とは独立に「称格」という概念を導入することで、たとえば、1人称であるが1人称ではないとか、2人称であるが3人称でもあるという奇妙な「説明」をしなくてすむことはこれまで述べたことであるが、そのほかに「所有詞」(seu, sua etc.), 「指示詞」(este, esse, aquele etc.), 場所の副詞(aqui, aí, ali etc.) の現われかたも、「人称」、「称格」の概念を採用すれば明確に説明することができる。このことについてはすでにべつとところで論じたのでここでは触れない。^{注7}

「人称」を意味するラテン語の *persona* には「仮面」の意味のあることはよく知られている。この仮面という言葉を用いてこれまで述べたことを要約して言い換えればつぎようになる。「入門」も言っているように話し手と聞き手というのは言語行動の基本的な要素である。この二つを欠いたときには言語行動は通常成立しない。^{注8} だが話し手がかぶる仮面、話し手が聞き手にかぶせる仮面は常に一定していて不変というわけではない。つまり話し手がかぶる仮面は常に第一の仮面(=1人称)、聞き手にかぶせる仮面は常に第二の仮面(=2人称)というわけではない。ばあいによれば話し手が第三の仮面(=3人称)をかぶることもあり得るし、聞き手に第三の仮面をかぶせることもあり得る。このように話し手がどんな仮面をかぶり、また聞き手にどんな仮面をかぶせるかは一定不変ではないにもかかわらず、それがあたかも一定不変であるかのごとき前提で人称を考えるために議論が混乱するのである。

ポルトガル語(ブラジルのポルトガル語にかぎらない)では話し手が通常かぶる仮面は第一の仮面であるが、しかし第三の仮面をかぶることもあることはすでに述べたとおりである(例えば(2))。聞き手に第2の仮面をかぶせることはブラジルではほとんどなく(しかしブラジルの南部や北部ではこの仮面も用いられる)、第三の仮面をかぶせるのが普通である(例えば(10))。また聞き手に第二の仮面をかぶせることが頻繁におこなわれるポルトガルにあっても(例えば(8))、それに劣らず第三の仮面も用いられる(例えば(7))。しかもこの第三の仮面の種類は、ブラジルのそれと比べると圧倒的に多い。第三の仮面としてブラジルで最も普通に用いられる種類は o senhor (a senhora など)、você (vocês) のほかにはあまりないのたいして、ポルトガルでは話し手との関連における血縁関係または、社会的関係を示す語、聞き手の職業を示す語、聞き手の個有名詞などが用いられるからである。^{注9}

これまでもっぱらポルトガル語にかぎって「人称」の問題を論じたのであるが、言語行動の基本的要素である「話し手」「聞き手」という役割と1人称、2人称、3人称とが常に一致するとはかぎらないのは、じつは、特殊ポルトガル語のみに認められる現象ではない。たとえばスペイン語の

Usted habla francés? (アナタハフランス語ヲ話セマスカ)

という文が示すように、usted は明らかに「聞き手」をさしているにもかかわらず、動詞

はいわゆる3人称と共起する動詞とその形式を等しくしている (cf. Tu hablas francés ?) ということはポルトガル語の

O senhor fala francês ?

に見られる現象とまったく同じである。またイタリア語の

Lei parla francese ?

という文にも同質の現象が認められる。

フランス語の、たとえば

Mademoiselle est servie.

という文の動詞は est でなければならないが

*Mademoiselle es servie.

に見られるように動詞が es であれば非文となる理由もこれまで述べた考え方にたてば必ずから明らかになる。

こうしてみると「人称」をめぐる問題は特殊ポルトガル語にかぎられた問題ではなくもっと一般的な性質を持つものと思われる。伝統文法における人称の標準的な説明には、「入門」とはまた違う意味で「一言では片づけられない点がある」のである。

〔注〕

注1. 小論で扱った問題はすでに拙稿「人称と称格—ポルトガル語の場合—」(東京外国語大学論集 24. (1972)で論じたが、田中春美他「言語学入門」(大修館1975)の「人称」の部分にポルトガル語の例があげられているので、それとの関連でこの問題をもう一度論じた。「ふたたび人称について」と題した所以である。しかし「言語学入門」の「人称」の考えかたの批判を直接の目的とするものではない。

注2. 「言語学入門」の1人称〔+ego〕、非1人称〔-ego〕がそれぞれいかなるものか明確でないことは本文に述べてあるが、ここでは非1人称には「話し手」が含まれないと解しておく。しかしこの理解は推定であるから誤っていることもあり得るが、つまり1人称、非1人称は「話し手」「聞き手」とは無関係であるという理解も成り立ち得るが、そのばあいには、本文でも述べているように、言語行動の基本的要素であると「言語学入門」の言う「話し手」「聞き手」と1人称、非1人称、あるいはその下位区分の2人称、3人称との関係が問題となろう。

注3. これも推定であるが、コンテキストから考えてこう定義するのが正しいと思われる。

注4. 小論の称格(自称格、対称格、他称格)の定義は、たとえば「国語学辞典」(1955)などのそれとは違うことに留意されたい。

注5. (14)は(2)と a mãe の称格が異なるので(≠2)としたが、日本語の訳は同じになる。

注6. 電話をかけた本人は知らないが、「聞き手」は Maria である。

注7. 前掲拙稿。

注8. 執行分析(performative analysis)において、たとえば declarative sentence に I DECLARE TO YOU を考えるのはこの意味では当然である。

注9. 松尾多希子「ポルトガル語対遇様式について」(ロマンス語研究 5. 1972)にその例が多くあげられている。